

# 広告特集

企画・制作  
朝日新聞社広告局



【しゅうかつ】  
人生の最期を  
自分の望むように  
準備すること

## 紙上 採録

# 朝日「終活」セミナー

～人生の最終ステージをデザインする～

【主催】朝日新聞社広告局 【協賛】アスカネット、オフィスシオン、シティインデックスナインス

朝日「終活」セミナーが11月7日、梅田スカイビル(大阪)で開催されました。万が一の時のことを考えて、大切な家族のために今からできることは何なのでしょう。 「終活」に詳しい専門家の講演に、240人の参加者は熱心に聞き入りました。その模様を要約してお届けします。



### 藤川 太さん

ファイナンシャルプランナー

ふじかわ・ふとし ●家計の見直し相談センター・生活デザイン株式会社代表取締役。山口県出身。慶應義塾大学大学院理工学研究科修了。同センターで生命保険の見直しを中心とした個人向け相談サービスを展開。著書に「サラリーマンは2度破産する」(朝日新聞出版)など多数。

## 今から考える 「相続と遺言」の話

第二部

# 「争族」を避ける遺言書

相続対策で重要なのは遺産分割です。納税と節税の対策もありますが、相続税のかかる人は相続があった人の中で約4%、多くの金融資産を持つ人だけです。今後予定されている相続税法改正で基礎控除が縮小されたとしても、全体の6%程度でしょう。今回は、遺産分割で相続をめぐるトラブル「争族」を中心に話をします。

「争族」の原因は大きく分けて七つ。①不動産や未公開株ばかりで分割しにくい。②特定の人が親の面倒をみた。③相続対策で重要な遺産を親が隠してしまっている。④特定の相続人に生前贈与していた。⑤借金が多い。⑥3カ月以内なら相続放棄できますが、債権者は黙っていること

があり、相続で借金まで背負います。⑥言うことがコロコロ変わる。⑦「これあげる」など適当に言うのは、後でもめまします。⑦中途半端な遺言は誰に何を相続させるか明確でなければ、遺言になりません。こういった「争族」を回避するのが遺言です。まずエンディングノートで過去を振り返り、財産の棚卸しをしてください。思いを整理して、法的効力のあ

る遺言書に進みましょう。遺言書には3種類あります。①自筆証書遺言は、書きで簡単ですが、内容が法的要件を満たしていなければ無効になり、破棄されたり見つからなかったりする恐れがあります。②公正証書遺言は、公証役場で公証人が作成する遺言で、改ざんや紛失も防げる確実な方法です。費用は、例えば相続人3人で相続財産1人あたり2千万円だと8万円です。③秘密証書遺言は内容を秘密にできますが、法的不備があれば無効になる恐れがあります。

# 人生をより充実させる 「終活」への取り組み

第一部

## 今を楽しく生きる 「老いじたく」のすすめ

日本は人口の約23%が65歳以上の高齢者で、他国と比べても急激に高齢化が進んでいます。核家族化も進み、夫婦と子どもだけの世帯と単身世帯を合わせると、人口の約60%を占めます。こうした状況に伴い、年金や医療保険、独居高齢者の増加による孤独死といった社会問題が生まれ、認知症患者の増加による成年後見制度の充実も求められています。また来年4月の介護保険法改正で24時間対応の訪問サービスが始まることから、自宅での看取りが増えることが予想されます。

1995年以降、葬儀場所の主流は、立派な葬儀会館になりました。大勢の会葬者が快適に参列できて見栄えがいいこと、葬儀の決定権が女性に移り自宅での葬儀を避けるようになったことが、背景にあるでしょう。葬儀会館は、いわば「おもてなしの施設」で、僧侶はゲスト的存在になり、宗教離れが進みました。お墓や仏壇は不要という人も増えています。

10年前の調査(※)で、葬儀の規模は「親しい人とこぢまりしてほしい」と「葬儀をしてほしくない(家族だけで埋葬)」を合わせると70%を超えました。立派な会館葬を体験した人たちが、自分の時にはいらなそうと思いついていたのです。実際、3〜4年前から葬儀は小規模化し、身内10〜15人だけの家族葬が増えました。葬儀をせず、火葬場で簡単にお参りする直葬も増えています。しきたりにこだわらない個性的な葬儀やお別れ会なども見られるよ

うになりました。人は亡くなると「遺体・遺骨・遺族・遺産・遺品・遺言」の六つの「遺」を残します。遺体に関わる葬儀は、ぜひ事前に自分で葬儀社だけでなく、担当者も選んでおいていただきたい。葬儀の話をするなど縁起でもないと思う人もいます。考えること自体がづらいかもしれませんが、準備をせずに亡くなって、動揺したまま葬儀を行うことは、遺族にとっても後悔することになりかねません。遺骨は、骨壺やア

# 葬儀は事前に選んでおく時代



### 寺尾 俊一さん

家族葬専門葬儀社オフィスシオン代表  
「老いじたく練習帖」著者

てらおしゆんいち ●1962年三重県生まれ。東海大学文学部卒業。葬祭業に30年以上携わる葬祭コンサルタント。1級葬祭ディレクター、グリーンケア・アドバイザー、儀典オーガナイザーの資格をもつ。2012年1月、全面監修を行った「まんがで丸わか川はじめてのお葬式」(イースト・プレス)が出版予定。

をしてほしくない(家族だけで埋葬)」を合わせると70%を超えました。立派な会館葬を体験した人たちが、自分の時にはいらなそうと思いついていたのです。実際、3〜4年前から葬儀は小規模化し、身内10〜15人だけの家族葬が増えました。葬儀をせず、火葬場で簡単にお参りする直葬も増えています。しきたりにこだわらない個性的な葬儀やお別れ会なども見られるよ

クセサリーにするなどの手元供養、共同のお墓に入る永代供養、散骨(自然葬)も選択肢です。また、法的に関係のない遺品については、エンディングノートを書くのがおすすめです。自分の人生を見つめることで、今後を生きるヒントにもなります。遺影は、生前遺影を預けておけるサービスがありますので、利用するのも良いでしょう。

「無縁社会」といわれるように、血縁、地縁、社縁が希薄化しましたが、新たな第四の縁があるはずです。私はそれを、束縛されず心と心でつながる「心縁」と名づけました。心の絆を深めるとともに、誰もが迎える死を見つめてこそ、一瞬一瞬を大切に生きていけると思います。

※「葬儀にかかわる費用等調査報告書」東京都生活文化局(2001年)

